

引揚港博多の思い出

福岡市早良区

納富 寛

はじめに

終戦後、全国で最も多い約130万人が外地から引揚げ、また朝鮮・台湾へ約50万人を送り出した引揚港であった博多港の中央埠頭が、ウォーターフロント開発のため、古い木造倉庫等はすべて取り壊されて大きく変貌しようとしている。今ではかつて引揚港であったことを知る人も少なくなっている。また、私が勤務した税関の資料にも殆ど記録がないようなことから、引揚げの関係諸資料を調べると共に、私の記憶をよび起こしながら当時のことを回想することとしたい。

一、引揚げが開始された頃の博多港

当時、博多港築港電停前から海岸に通じる大通りの附近には、食料品・衣類・外国たばこ等の闇市が公然と開かれ、終戦直後の混乱の様相を呈していた。博多港通りの入口附近（現福岡市港湾局の前面附近）に米軍の検問所が設置され、鉄帽にライフル銃を持ったM・Pと日本の警察官が立哨し、一帯はものものしいバリケードが張りめぐされていた。

博多港が引揚港に指定されたのは、地理的条件に適し、軍需品の積出港であったことや、港湾施設の被害が少なく、また機雷掃海が早く完了したことが一因のようである。

税関の記録によると、博多港の引揚検問の業務開始は昭和20年10月27日となっているが、博多港の引揚げは終戦と同時に始まっている。というのは、朝鮮南部からの引揚者が家族も含めて小型の闇船等を傭船し、博多港やその周辺に上陸しているからである。その数は約14万人にも及んだといわれている。同年9月3日には博釜連絡船「徳寿丸」（3600t）が引揚者2764名を乗せて入港している。だがこの頃は税関（当時九州海運局福岡支局）は何もタッチしていないのが実状のようである。

一方、昭和20年9月30日、米軍が福岡に進駐し、米軍は連合軍最高司令部の名の下に、同年10月5日博多港を引揚港として指定した。同時に米海兵隊の将校をポートディレクターに任命し、本格的に引揚港として稼働することとなった。これを受けて税関の引揚者に対する検問業務も同年10月27日から開始された。同年11月24日には博多港引揚援護局も設置され、引揚港博多がフルに活動することとなったのである。

当初進駐軍から引揚者検問の要員として、福岡県庁にその日本側要員を確保せよと命令され、あわてた県庁ではこれは税関の仕事だといって当時の九州海運局のA支局長に申し入れ、それをA支局長が受けたといういきさつもあったと聞いている。その際、県庁からの助産婦学校の生徒さんを女性検査要員として応援させたそうである。

二. 引揚者の状況及び税関調査（検問）の状況

博多港の引揚げは、まず朝鮮南部から始まって昭和20年末には殆んど終了、次いで上海港から中国東北部地方の旧軍人や一般邦人の引揚げが開始され、さらに昭和21年5月15日の雲仙丸を皮切りに旧満州（現在、中国東北部地方）コロ島からの引揚げが本格化した。日が経つにつれ、満州奥地からの引揚げの悲惨さは目を覆うものがあった。携帯品といってもリュックや風呂敷包みが全財産で、着の身着のままという人が大半で、若い女性の中にはソ連兵の暴行を逃れるため髪を切った人も見受けられた。

次に検問の状況であるが、私が税関に採用された昭和21年2月頃は検問体制も整っており、邦人引揚検問所に約20名位の検査要員がいた。検査といっても米軍の兵隊が検問するのを我々が立会うというようなもので、検問は迅速に行われた。米軍が検査の対象としていたのは、

1. 写真（外地・特に満州方面の地域が写っている写真はすべて没収、CIA（情報局）の米兵が事情聴取するなど調査に当たっていた）
2. 銃刀類（勿論、復員の旧日本軍は出国地で武装解除され、銃器の所持はなかったが、米兵はナイフ類でも刃物はすべて凶器と見なして没収した）

であったが、この他海外から持ち帰った現金の超過分や預金通帳の証券類の保管業務はすべて日本側税関職員が担当し、保管証を発行した。引揚者に認められた持帰金は

一般人		1000円（1人当たり）
軍人	将校	500円
	下士官以下	200円
	軍属	1000円

この取扱いは連合軍最高司令部（GHQ）の指令によるもので、この保管業務が大変な仕事であった。引揚船が重複した日など徹夜で処理したこともあった。また、後生大事に持ち帰ったトラの子の財産を預るのだから本当に胸が痛む思いであった。これらの保管件数は約120万件にも及んだ。

エピソード

邦人引揚者の中には映画女優や、戦争中の反戦活動家、野坂参三氏などが帰国し、その度に話題をまいた。なかでも「支那の夜」等で一世をふうびした李香蘭（山口淑子）が帰国した際は米軍の現場の隊長が米軍の事務室に招き入れ一曲歌を所望、ところが「こんな所で歌なんか歌えません」と憤然として席を立てて出ていったのが印象に残っている。

むすび

ともあれ昭和22年4月、博多港の引揚業務は終わったが、当時引揚者から預かった証券類の返還事務は今も税関で続けられており、引き取り手を待っている。未返還の証券類の中にはこの私が預かったものもあるかもしれない。当時検問所を通過していった引揚者の姿を思い出すとともに、預けられた貴重な財産が一日も早くこれらの人達に戻り、戦後が終わることを祈ってやまない。